

# 震宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第123号

平成29年7月7日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山3006

公益財団法人高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話 0736-56-2029

URL <http://www.reihokan.or.jp>

## 利用案内

■開館時間

■5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

■11月1日～4月30日

8時30分～17時00分

■休館日 年末年始のみ

■拝観料 大人 600円

高・大学生 350円

小・中学生 250円

高野町に住居票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。

■専用駐車場あり



伽藍西塔前の石灯籠  
西塔が天保五年（一八三四）に再建された時に力を尽くした、正智院第四〇世良應とその兄である華岡青洲（世界初の全身麻酔手術に成功）の名前が刻まれています。

## 第123号 目次

夏期企画展のご案内	2～3
収蔵品の紹介97	4
高野山の古建築 第二十七回	5
高野山の考古学（十五）	6～7
古絵図で巡る高野山探訪（その五）	8～9
高野山の文書（十一）	10
高野山霊宝館からのご案内	11
霊宝館の庭園	12

夏期企画展  
「正智院の名宝」  
7月15日(土)～10月9日(月)・(祝)

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！ ホームページ割引券もご利用ください

平成29年度 夏期企画展

# 「正智院の名宝」

期間 7月15日(土)～10月9日(月)・祝



重文 毘沙門天立像



重文 不動明王坐像

前期… 7月15日(土)～8月21日(月)  
後期… 8月23日(水)～10月9日(月)・祝

正智院は天永年間(一一一〇～一一一三)、正智房教覚によって開かれ、鎌倉時代には「高野八傑」の一人とされる学僧・道範を輩出するなど高野山でも屈指の学問寺院としてその法灯を守り続けてきました。伽藍の北西に位置し、庭の「影向岩」には高野明神が現出したと伝えられ、現在の伽藍西塔は江戸時代の正智院住職が数代にわたり尽力し再建を果たすなど、高野山の歴史の中で重要な位置を占めます。本展では正智院と関連寺院に伝わる名宝を、霊宝館未収蔵品を含め多数展示公開いたします。一寺院が内包する歴史と伝統を通して、多数の子院で構成される高野山一二〇〇年の歩みの一端を感じていただければ幸いです。

## 主な展示品

### 彫刻

重文 不動明王坐像

重文 毘沙門天立像

阿弥陀如来坐像、観音・勢至菩薩立像(正智院本尊) ※

阿弥陀如来立像(善集院本尊) ※

正智院

正智院

正智院

善集院





重文 銅五鈎鈴



影向明神像



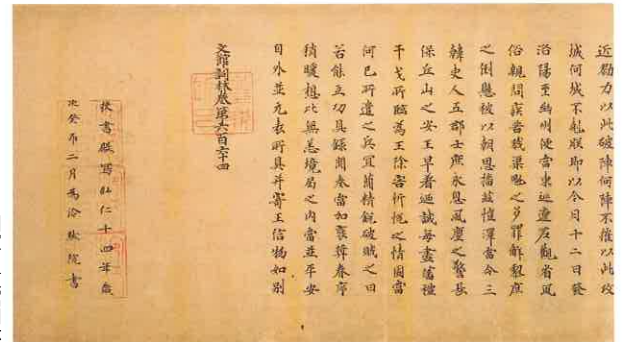
重文 八宗論大日如来像



重文 八字文殊曼荼羅図



重文 仏頂尊勝陀羅尼經



国宝 文館詞林

■ 絵画

- 重文 普賢延命菩薩像 正智院
- 重文 八字文殊曼荼羅図 正智院
- 重文 紅玻璃阿弥陀像 正智院
- 重文 八宗論大日如来像 善集院
- 道範阿闍梨像 正智院
- 稚児大師像(詳細は4ページ) 正智院
- 影向明神像 正智院
- 不動明王二童子像※ 正智院
- 青面金剛像※ 正智院

■ 書跡

- 国宝 文館詞林 [前期] 正智院
- 重文 仏頂尊勝陀羅尼經 [後期] 正智院
- 重文 般若心経※ [前期] 正智院
- 般若心経(隅寺心経)※ [前期] 正智院
- 善悪因果経※ [後期] 正智院

■ 工芸

- 重文 銅五鈎鈴 正智院
- 銅五鈎杵※ 正智院
- 双耳水差 野々村仁清作※ [前期] 正智院
- 鏤絵七宝繫文盃洗 初代高橋道八作※ [後期] 正智院

◎期間中、一部展示替を行います。  
◎文化財の保存上、展示品が変更される場合があります。

ミュージアム法話開催

ミュージアム法話(お坊さんによる法話と展示案内)を開催いたします。

10月7日(土) 13時より 約45分間

予約不要、参加費無料(要拝観料)

## 収蔵品の紹介 97

## 稚児大師像 一幅

絹本着色 室町時代（十五—十六世紀）  
正智院蔵 縦八二・五cm 横三八・九cm

みなさんは毎年六月十五日に開催される「青葉まつり」をご存じですか？この日は弘法大師空海の誕生日で、高野山では宗祖降誕会やパレードが行われ、一年で最も賑やかな日となっております。弘法大師は宝亀五年（七七四）に現在の香川県でお生まれになりました。幼名を真魚とい

い、幼少の頃から非常に利発で、各種弘法大師伝によると子供らしい遊びはせず、土で仏像をつくり、小さい祠を建ててそこに安置し、朝夕拜んでおられたそうです。本像は月輪内に、小袖と袴を身につけ、合掌して蓮華の上に正座する幼少期の弘法大師を描いた、「稚児

大師」と呼ばれる肖像画です。小袖の赤と、蓮台の緑が目を引き、肩まで伸ばした髪に前髪は眉の上で切りそろえ、頭頂部はやや平たく丸顔が愛らしい像です。弘法大師が入定の六日前に弟子たちに与え伝えたと言われる、二十五箇条からなる「御遺告」によると、大師が五、六歳の頃、八葉の蓮華に座って仏さまたちと語らう夢を每晚見たといい、その時の姿を絵画化したのが稚児大師像だとされます。このような稚児大師像は十数点現存するとされ、古いものだと重要文化財に指定される、兵庫県香雪美術館所蔵本（もとは高野山にあったもので、かつては丹生明神・

高野明神像と三幅対だったそうです）と、愛媛県指定文化財の光林寺所蔵本が鎌倉時代の作品です。本像はそれらより少し新しく、室町時代に制作されたものです。高野山では他に、江戸時代に制作された、清浄心院所蔵本が知られます。

本像は狩場明神像、影向明神像と三幅対で伝わっており、正智院の庭に現れたという、白い束帯姿の影向明神（狩場明神〔高野明神〕の別名）との組み合わせは、本像を所蔵する正智院ならではの、という感じがします。高野山を代表する、稚児大師像の優品です。

（福形安希子）





連載

高野山の古建築  
第二十七回 正智院

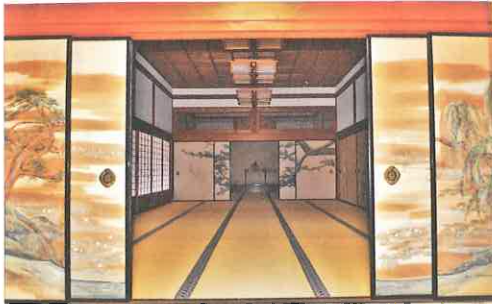
鳴海 祥博



本堂内部 大楽院というお寺の本堂を移築したものの。そのため、右手の一段高い内陣の奥に大楽院の本尊が、左手の奥に正智院の本尊が祀られている。



正智院の建物全景 唐破屋根の玄関のある建物が客殿で、左奥に土蔵造りの本堂が建つ。玄関に接する右手の軒が台所。



客殿広間 客殿正面側には20畳敷きの広間を中心に座敷が連続する。法会の空間として高野山の客殿の伝統を伝えている。襖に描かれた絵画が美しい。



客殿背面側の座敷 客殿の背面側には8畳敷きの座敷が並ぶ。各部屋に床を構えるなど、参詣者の接待の場として新たな座敷構成が試みられている。

企画展「正智院の名宝」の開催に合わせ、正智院を訪ねましょう。正智院は壇上伽藍の北西にあります。平安時代後期に創立され、鎌倉時代初めに道範という傑出した学僧が住持したこと、その後教学の中心寺院となり、江戸時代には宝門・寿門という高野山の二大学派のうち、宝門派の学僧を養成する寺院として「法談所」と称されました。沢山の典籍や仏像、仏画が伝来しているのは、このような来歴と格式があるからに他ならないでしょう。

背後に山並みを負った正智院の門前の風景は格別です。恐る恐る山門を潜り、境内の建物を見回してみました。沢山の宝物が伝来している割には建物は比較的新しい、という印象でした。

そこでご住職の「前官さま」(高野山の最高位である「法印」を勤められたお坊さまの尊称です)にお話を伺いました。前官さまは四歳の時に正智院に入れられ、昭和十二年(一九三七)に火災に遭い、物置を改造した住まいに移ったとのこと。またそれ以前の大正十三年(一九二四)にも大火災があり、その後大楽院というお寺の本堂を移築したのが現在の土蔵造りの本堂で、それは昭和の火災の際には八棟の土蔵とともに焼け残ったこと、現在の多くの建物は昭和十三年以降順次復興したことが出来ました。度重なる火災から寺宝を護り、復興に奔走した歴代のご住職に頭の下がる思いです。

客殿を中心にして左右に本堂と台所を配置する建て方は、高野山内の寺院に共通する独特の形式ですが、細かに見ると違うところもあります。例えば、客殿には古くは必ずあった「土室」という囲炉裏のある部屋や、仏間がありません。また客殿と台所の間に設けられていた「中門」という渡り廊下のような空間も省略されています。

客殿は正面と背面に大きく二分され、正面側では二十畳敷きの広間を中心に十畳敷きの座敷が左に一室、右に二室、合計四室が連なり、背面側では八畳から十畳の座敷が五室、連なっています。それらは襖で間仕切られ、襖を開ければ連続した座敷になります。大小の法会や来客の人数に応じて対応できる工夫です。

昭和十三年から再建された現在の客殿は、それまでの学僧の養成や修行を専門とした場から、多くの参詣者を受け入れ高野山信仰を広める宿坊寺院としての機能拡充へと、近代という新しい時代の中で変化し始めた山内寺院の姿を伝える貴重な歴史的建物です。

※一般参拝は出来ません。

# 小仏塔の世界④

## 奥之院出土金銅製宝篋印塔（後編）

公益財団法人 元興寺文化財研究所

狭川 真一

前回紹介した金銅製宝篋印塔について、詳細に観察する機会を得ましたので、今回はその構造について紹介いたします。

### 各部の寸法と構造

すべての部位は銅製の鑄造品とみられ、一〇個の部品を組み合わせ、高さ二五・九センチの一基の塔に組み立てています。外面は全面鍍金されてはいますが、内面には施されていません。では、各部位ごとに観察してゆきましょう。

**基礎** 一辺九・六センチ、高さ四・六センチのやや中程が膨らんだ方形の台の上に、三段の階段部分（高さ一・九センチ）を組み合わせています。最下段の二か所に小さな金具を固定し、その先を台の上の穴（現状では穴は壊れています）に差し込ん

でまた固定したようです。台の上面は一辺五・五センチの方形に切り取られ、階段上面も一辺三・四センチの方形に開いています。底から塔身まで、貫通する空間を確保したよう

です。方形台の下端部内側には小さな段差が作られており、これより下に何かはめ込まれていたことを示していますが、今は何も残っていません。また方形台の側面には鑿で彫

り込んだ銘文があります。その内容は前回ご紹介したところですが。  
**塔身** 一辺五・〇センチ、高さ四・八センチで、側面に円形の月輪を少し浮き出るように作っています。上

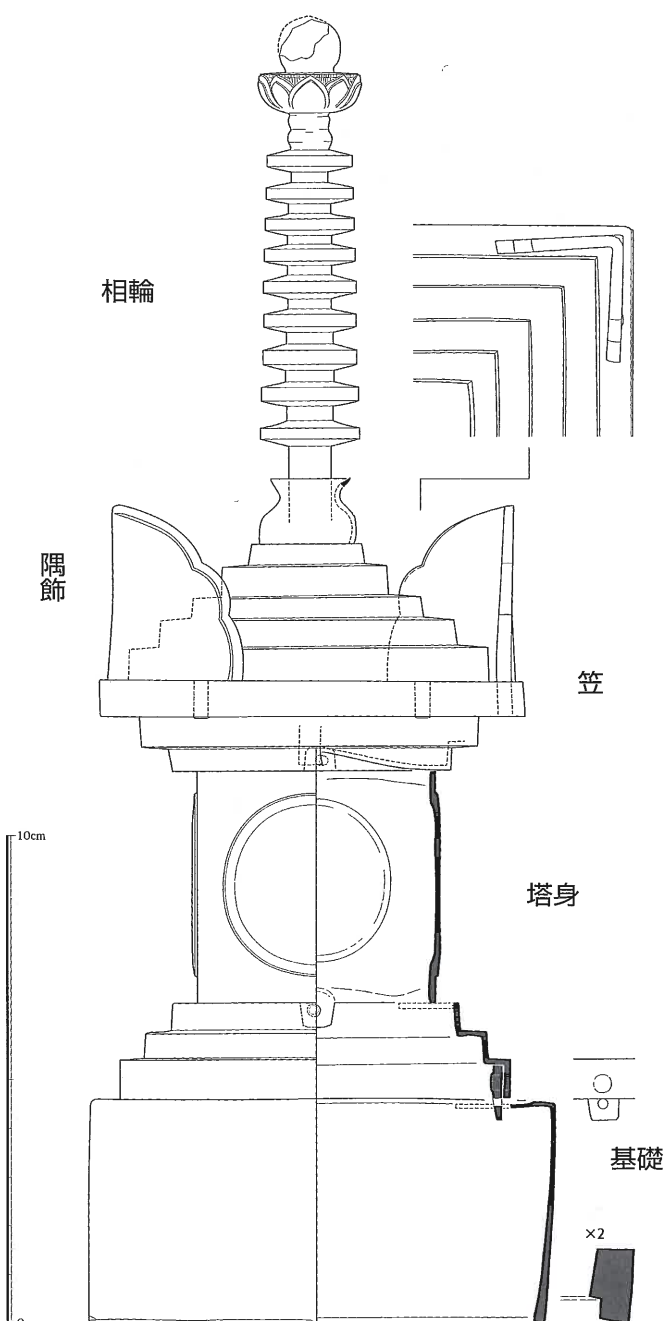


図1 奥之院出土金銅製宝篋印塔実測図 (2/3)

下の各二か所に爪が出て、それぞれ基礎と笠に差し込まれ、繋ぎ止められていたようです。内部は完全な空洞で上下とも貫通しています。

笠 軒と呼ばれる最も幅の広い部分で一辺八・六センチ。そこから下へ二段の階段を一鑄で作り出しています。さらに上へ五段の階段を別鑄して重ねています。全部を合わせた高さは、四・六センチです。すべての部品がしっかりと固定されていますので、どのような構造なのか不明です。しかし、上部にある相輪の軸部分は笠の底部まで貫通し、その先端をかためて固定しています。さらに内部は最上部まで空洞となり、驚くべきことに火葬された遺骨の一部が奉安されています。

また、軒上面の四隅には、隅飾と呼ばれるL字形で薄い衝立のような部材を置き、仏塔の大切な部分を

蔽っています。外側はわずかに反りながら立ち上がり、内側は三弧の山形に作っています。この山形に沿うように沈線で片側のみ縁取りをしています。掲載した図は、左側に正面から見た隅飾、右側に裏面と側面から見たところを表現しました。底部に軸部を作り出して、笠軒の穴へ差し込み固定し、その先端を研磨して隠す丁寧な作りをしています。

相輪 一体で鑄造されたもので、九輪の上に受花と宝珠が作られており、笠上面からの高さは一〇・〇センチです。九輪は直径一・八〜二・一センチで薄い算盤玉のような形をしています。これは鑄造後に鑄型から抜き取り易くするためでしょう。受花は主弁と間弁を交互に表現し、全部で八弁あります。また弁の上部には雄芯(細かな縦線)が刻まれています。最上部の宝珠はほぼ球形で

全部で八弁あります。また弁の上部には雄芯(細かな縦線)が刻まれています。最上部の宝珠はほぼ球形で



写真1 奥之院出土金銅製宝篋印塔 (金剛峯寺蔵、重文)

ですが、一部が腐食して当初の形を失っています。笠上部と相輪の間には伏鉢と受花が表現されますが、これは薄い別材で作られていて、内側を相輪の軸部が貫通しています。

遺骨はどこに

さて、この塔は南保又二郎の遺骨を奉安した塔であると銘文には刻まれています。笠部の空洞内には火葬された遺骨が残されており、これは又二郎の遺骨の一部に違いありません。しかし、この部分だけが遺骨埋納場所でしょうか。その疑問を得たのは、基礎の方形台部分最下端で確認した小さな段差の存在です。この段差は、明らかに方形台以下にあつた何かと組み合っていたことを教えています。参考になる類例を探してみましよう。

奈良の東大寺を再興した俊乗坊重源という高僧が、近江国の敏満寺というお寺へ建久九年(一一九八)に寄進した金銅製の三角五輪塔があります。この塔は、基礎にあたる地輪と呼ばれる部分の内部に、脚付きの箱を納められるようにし、その箱



写真2 敏満寺に奉納された金銅製三角五輪塔 (写真は模造品/多賀町文化財センター蔵)

の中に蓮台に乗った水晶製舍利容器を奉安しています(写真2)。これを参考にしますと、おそらく基礎から塔身の内部に収まるような容器内に遺骨の重要部分を入れ、蓮台などに乗せて基礎内にはめ込むようにしたのではないかと推定できます。基礎最下部の段差の存在と、塔身まで貫通する空洞を作っているのはこのためです。

この宝篋印塔は明治末年頃に御廟付近で偶然見つかりました。おそらく発見者は、金色に輝く仏塔に気を取られ、地中に残った遺骨には気が付かなかつたのでしょう。南保又二郎の遺骨の一部と埋納容器は、まだ弘法大師の御廟の傍で眠っていると思います。

【参考文献】

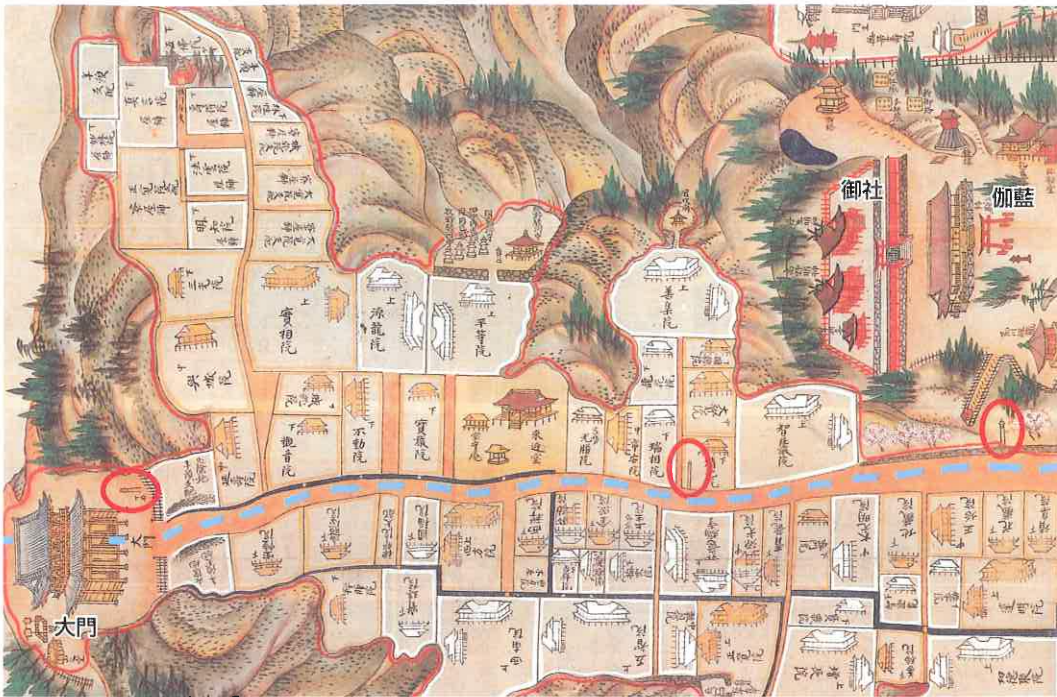
巽 三郎編 一九七五『高野山奥之院の地寶』和歌山県教育委員会



# 「古絵図で巡る高野山探訪」

(その五)

## 高野山町石道



「高野山全山絵図」(部分) 寛政8年(1795) 西室院蔵 線は高野山町石道 ○印は町石



文永3年(1266)に建立された金剛界の「二十三町石」(奥之院)



大門付近の胎蔵界の「六町石」



高野山町石から出土した礫石経(金剛峯寺蔵) 金光明最勝王経が、いくつもの石に分割して墨書されています

九度山から高野山の伽藍の大塔まで、町石の本数は、

わされ、これらを繋ぐために整備されたのが始まりと伝えられます。高野山町石道の特徴は、その道程の一町(約八〇〜一一〇m)毎に「町石」と呼ばれる五輪塔の形をした石製の卒塔婆が建立されています。空海が建立した当初、これらの卒塔婆は「木製」でした。しかし、その材質が木製であることから、長期間の屋外での維持が難しいため、文永二年(一二六五)高野山遍照尊院の覚敷が願主となつて全国を勧進し、二十年の歳月をかけて石製のもの

が再建されました。施主には、鎌倉時代の有力者である北条時宗、幕府の有力御家人の安達泰盛、朝廷では後嵯峨上皇、また高野山の僧侶らも名を連ねています。

の覚敷が願主となつて全国を勧進し、二十年の歳月をかけて石製のもの

が再建されました。施主には、鎌倉時代の有力者である北条時宗、幕府の有力御家人の安達泰盛、朝廷では後嵯峨上皇、また高野山の僧侶らも名を連ねています。

高野山町石道は、弘法大師空海(以下、「空海」という)が高野山を開創した際、高野山は女人禁制のため、山下の慈尊院に母の玉依御前を住ま

高野山町石道は、弘法大師空海(以下、「空海」という)が高野山を開創した際、高野山は女人禁制のため、山下の慈尊院に母の玉依御前を住ま

古絵図に描かれています。高野山町石道は、高野山の歴史上、重要な巡礼道で、「高野山全山絵図」(寛政八年(一七九五) 西室院蔵)などの

古絵図に描かれています。高野山町石道は、高野山の歴史上、重要な巡礼道で、「高野山全山絵図」(寛政八年(一七九五) 西室院蔵)などの

### 祈りの道・高野山町石道

高野山の麓にある慈尊院(九度山町)から高野山へいたる「高野山町石道」は、高野山の歴史上、重要な

高野山の麓にある慈尊院(九度山町)から高野山へいたる「高野山町石道」は、高野山の歴史上、重要な



の約二〇キロの道程に一八〇基、さらに大塔から奥之院の空海が入定している御廟までの約四キロの道程に三六基が建立されています。前者の一八〇基は真言宗の教義の元となる「胎蔵界曼荼羅」の一八〇尊、後者の三六基は同じく「金剛界曼荼羅」の金剛界三七尊を表しています。なお、金剛界は三七尊であるのに対して、三六基の町石しか存在しないのは、全体で一尊とされるためです。

また、町石には「町毎の番付」、「願主」、「建立年月日」等のほか、仏を表す「梵字」などが刻まれています。「梵字」はすなわち「仏」であることから、町石一つ一つが仏そのものとされます。したがって、九度山から高野山奥之院の御廟を行脚することとは、参詣者が自らの身体を使って、仏の世界に入り、一体となる、「即身成仏」（生きながら悟り、仏となること）を体感できる修行の道となつています。

### 考古学からみた高野山町石

石材については花崗岩、いわゆる御影石と呼ばれ、その法量は、一辺が約三〇センチ、長さ約三mもあります。これらは、現在の神戸市の六甲山麓から切り出されたものと考えられています。御影石は、現在、建材や墓石などに用いられ普及してい

ますが、当時は一般的には普及していませんでした。しかし、高野山町石は大量、かつ巨大な石材を必要としたため、この事業をきっかけに御影石の石切場が開発されたという説があります。

また、町石の基礎には、鎌倉時代、いくつもの川原石に「金光明最勝王経」を墨書した礫石経を埋納していたことが発掘調査で確認されています。この経典は鎮護国家のために、写経されることが知られていることから、町石に埋納することですべての人々が平穩に暮らし、参詣者の道中の安全や福寿を祈ったものと考えられます。

このような町石ですが、同じ番付の町石が複数建つているところがあります。山中のものは、土砂崩れや台風の被害に遭い、斜面地にあるものは、倒壊して谷底に転落して行方が分からなくなったり、転落時に損壊したりしました。この場合、後世に再建されますが、その後、年月が経ち、谷底から発見されたりしたのは、元の場所付近に並べて建立されたことによります。

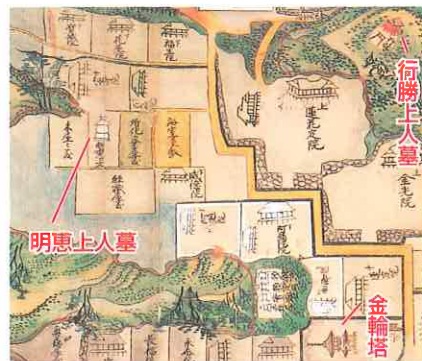
一方、高野山上でも町石が破損することがありました。推測ですが、高野山は昔から火事が多いため、子院（塔頭）の建物に近接していたため倒壊したのでしょうか。そのような

破損した町石の行方はどのようになるのでしょうか。

### 高野山町石の再利用

現在、奥之院や伽藍では破損後に遺棄されたものを確認しています。が、なかには再利用された興味深い事例があります。

高野山の五之室にある明恵上人（一一七三—一二三二）の墓と清浄心院の台所の石組です。明恵上人の墓は『高野山壇上出家絵図』（宝永三年（一七〇六）金剛峯寺蔵）にも描かれ、町石の頭部の五輪塔部分を、



『高野山壇上出家絵図』（部分／高野山・五之室付近）宝永3年（1706）金剛峯寺蔵 画面左側中央に明恵上人墓がみられます



「明恵上人墓」（高野山・五之室）に再利用された高野山町石

また清浄心院の台所の石組は、町石の地輪部分が再利用されています。

一見すると、その再利用の用途に驚かされます。しかし、高野山は古来、木材は山下や周囲の山から、石材は山下から持ち込まれることから、その入手する手間や時間などは相当なものでした。そのため、たとえ町石であっても破損したものを再利用したのでしょうか。日本人の良き習慣、物を大切にすることが窺えます。

（鳥羽正剛）



「台所の石組」（清浄心院）に再利用された高野山町石



町石 近景（清浄心院）（写真は右90度転回）

# 高野山の文書 (十二)

## 「高野山檢校澄喜御影堂陀羅尼田寄進状」について

今回紹介するのは、「高野山檢校澄喜御影堂陀羅尼田寄進状」(国宝『続宝簡集』巻三 金剛峯寺藏)と

いう、高野山檢校澄喜が建武元年(一二三四)に御影堂陀羅尼田を寄進した寄進状です。この御影堂陀羅尼田ですが、高野山壇上伽藍の御影堂は弘法大師空海の御影が祀られるお堂として有名ですが、陀羅尼田

に関しては聞き慣れない方も多いたのではないのでしょうか。御影堂陀羅尼田とは、治承四年(一一八〇)十月に開始した「御影堂長日尊勝陀羅尼」読誦の費用捻出のために集められた田地です。尊勝陀羅尼という梵字で書かれた呪文の功德が滅罪生善(現世の罪を消し、死後の善報を生じさせること)にあり、その御利益に預かる

うと、様々な僧俗から寄進されました。はじめは少数の寄進でしたが、鎌倉時代後期の文永(弘安年間(一二六四(八七)に寄進数が増大し、十四世紀前半にはそのピークを迎えました。こうした背景には、弘法大師入定信仰や高野山信仰の流行があったようです。この寄進状の発給は建武元年(一二三四)です。この寄進状の発給は建武元年(一二三四)です。この寄進状の発給は建武元年(一二三四)です。

高野山檢校澄喜御影堂陀羅尼田寄進状 (『続宝簡集』巻3)



山(正智院)の弟子だったようです。高野山麓の隅田(現、橋本市隅田町)の出身で、元弘元年(一二三三)より三年間、同三年(一二三三)まで高野山檢校を務めていました。寄進状の内容を読むと、弘法大師空海との仏縁と厚德に報いるためと来世の化導にあずかるために、相伝の地である官省符庄下方市原村(現、和歌山県伊都郡かつらぎ町丁ノ町)の田地一段(約一〇〇町)を寄進したということ等が前半部分に書かれています。後半部分には、この田地の領有について書かれており、この田地の「本券」を正智院に居住の際に紛失したが、正智院先代(誰かは不明)の「長帳」が明らかであったので、長年領有し、今後も変わらず、死後速やかに寄進するつもりだと記しています。

今でもそうですが当時も、土地や役職を他人に譲る時、自分のものであることを証明しなければなりません。「本券」は、そのための根本文書を指します。当時は、こうした証明文書は、土地を譲る際に相手に渡

す決まりでした。ところが、今回はそれを紛失したとのことです。非常に大変な事態ですが、代わりの証拠として「長帳」が出てきます。「長帳」とは、(財産)処分状のことで高野山の寺院では長帳という呼び方をしていたようです。師僧が、寺院を継承する僧侶やその他の弟子に聖教や法具、あるいは所領・所職を譲る旨を記した、今でいう遺言状のようなものといえるでしょう。別の長帳の話ですが、正智院第十世の永澄は自身の処分状(長帳)で「悪筆のためはばかりが多いが、後の証明のため自筆で記す。」と記しています。この言葉が示すとおり、処分状は、土地の領有権を示す証明書としての役割がありました。そして、今回紹介した寄進状は、その役割が果たされたわかりやすい事例といえるでしょう。

※今回紹介した文書は夏期企画展では展示いたしません。あらかじめご了承ください。



# 高野山霊宝館からのご案内

これからの催し・展覧会

## ◎第38回高野山大宝蔵展

「高野山の名宝」

『平家物語』の時代の高野山にスポットを当てて、物語と同時代の文化財や、人物ゆかりの品を展示予定。

平成29年10月14日(土)～12月3日(日)

〔主な出陳品〕(仮)

国宝 宝簡集巻第三三「源義経書状」

国宝 金銀字一切経(中尊寺経)

重文 両界曼荼羅図(血曼荼羅)

以上金剛峯寺

〔期間中展示替あり〕

## 宝物貸出情報

### ○仙台市博物館

東日本大震災復興祈念特別展

「空海と高野山の至宝」

国宝10件、重文31件を含む多数の名宝を展示。「飛行三鈷杵(金銅三鈷杵、重文)」を展示する貴重な機会です。

7月1日(土)～8月27日(日)

前期…7月1日(土)～7月30日(日)

後期…8月1日(火)～8月27日(日)

〔主な出陳品〕

国宝 聾瞽指帰 下巻〔後期〕

国宝 諸尊仏龕

国宝 八大童子立像のうち六軀

制吒迦(制多伽)・清浄比丘

〔前期〕

恵光・恵喜〔後期〕

指徳・阿耨達

以上 金剛峯寺

国宝 阿弥陀聖衆来迎図〔前期〕

有志八幡講

重文 大日如来坐像

重文 孔雀明王坐像〔前期〕

重文 金銅三鈷杵(飛行三鈷杵)

弘法大師坐像(萬日大師)

以上 金剛峯寺

ほか多数

〔期間中展示替あり〕

### ○真田宝物館

企画展「真田家の姫たち」

7月1日(土)～9月18日(月)祝

真田信之像・玉川右京像

蓮華定院

〔7/1～8/7展示〕

### ○岐阜市歴史博物館

織田信長公岐阜入城・岐阜命名

四五〇年記念特別展

「信長展―もてなし人信長? 知られざる素顔―」

7月14日(金)～8月20日(日)

重文 浅井長政像

〔7/14～30展示〕

重文 浅井長政夫人像(お市の方)

武田信玄(晴信)像

〔以上8/1～20展示〕

武田勝頼妻子像

以上 持明院

### ○奈良国立博物館

一千年忌記念特別展「源信」

7月15日(土)～9月3日(日)

国宝 金銀字一切経 金剛峯寺

国宝 阿弥陀聖衆来迎図

有志八幡講

〔8/22～9/3展示予定〕

重文 決定往生集 宝寿院

重文 往生瑞心伝 宝寿院

〔会期中展示替あり〕

### ○東京国立博物館

興福寺中金堂再建記念特別展「運慶」

9月26日(火)～11月26日(日)

国宝 八大童子立像のうち六軀

制多伽(制吒迦)・矜羯羅・清浄比丘・恵光・恵喜・烏俱婆識

金剛峯寺

〔国玉〕

10月3日(火)～11月26日(日)

国宝 聾瞽指帰 上巻 金剛峯寺

国宝 法華経巻第六(色紙) 〔10/17～29展示予定〕

金剛峯寺〔展示期間未定〕

※詳細は各館のホームページをご覧ください。



矜羯羅童子像

### ◎霊宝館友の会会員の募集

拝観時に会員証を受付窓口でご提示いただくと、会員本人のほか同伴者3名様まで無料で入館できます。展示替えは年4回ありますので、博物館・美術館鑑賞が好きな方には何度もお入館できますので大変お勧めです。

また霊宝館や高野山の文化財の情報掲載した機関紙「霊宝館だより」を年4回(予定)お届けい

たします。さらに、伽藍の御供所で会員証をご提示いただきますと金堂と大塔の内拝が無料となります。皆様のご入会をお待ちいたしております。

#### ＜年会費＞

一般会員(個人) 3,000円

賛助会員(法人) 30,000円

＜お問い合わせ先・申込先＞  
高野山霊宝館 霊宝館友の会係  
(電話0736-56-2029)

# ネムノキ・合歡木 眠木・ねぶりのき

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

ネムノキはマメ科・ネムノキ属の落葉高木です。我が国では本州から沖縄にかけて自生し、台湾、朝鮮、中国大陸、東南アジアに分布するといわれています。

国内で、この樹が選んで生える場所は、日当たりのよい海岸沿いや川(河)岸・谷沿い・道路脇・高木の少ない原野・斜面崩壊の跡地などであることを見聞しています。



羽状複葉と雨中の花

高野山塊でも山麓部から山頂部にかけて自生し、特に「高野山」という地域内では、現在、この樹の成木の個体数は、ごく少なく、そのうちでも環境の変化により樹勢のよくなるものもあります。ネムノキという和名の由来は、二回羽状複葉という鳥の羽のような形をした大きな葉の対生する小葉が夜になると互いに重なり合っ

て閉じる木、「眠るの木」といいます。別名はネムです。字は合歡、合歡木、夜合木、眠木、古くは合昏樹、襴布利なども当てられ、古語では合歡を、ねぶと読ませています。方言名には、こうか、こうかのき、ねぶたぎ、ねぶりがき、ねぶりのき、ねんぶりなどがあります。なお、この樹は春になつても冬眠から目覚めるのが極めておそく周辺の木々が若葉青葉となつた立夏を過ぎても新葉の芽吹きが見られないことがあります。ところが、夏がすすむにつれて大きな葉をひろげ、全体としては赤色に見える花をつけます。この赤色はおしべの花糸の色です。

「花よみ」・松田修著では「この羽状複葉が夏風にそよぐ姿は何んともいえない美しさである」と。松尾芭蕉は、雨中に咲く、この、ねぶの花を、中国の春秋時代の越の国の絶世の美女とされている西施にたとえています。「和漢三才圖會」には、「この樹を人家に植えると、その家の人たちは忿らず(腹を立てない)、互いに喜び楽しみ、憂いを忘れる」という意味のことが記載されています。なお同書には、この樹の名の一つとして戸利灑樹佛經とあるが、これは同属のシリサ・シリシヤ(戸利沙)・和名・ビルマネムとの混同ではと思われる。戸利沙(ビルマネム)は「過去七仏」の拘留孫仏が、その樹の下で成道したという菩提樹ともされています。「佛教語大辞典」でも、戸利沙樹について、合歡樹のこと、ねむり木のこと、と、ビルマネムとネムノキが同一視されています。ビルマネムは東南アジア熱帯原産だろうとされ、ネムノキより全体が大づくりで、日本では沖縄で植栽され、花は淡緑色から淡黄色に変色し花期は六月〜八月とのこと。この夏も、ネムノキの葉が繁り、美花が見(観)られる季節が近づいてきました。